関西自然保護機構会誌 *28*（2）：*227－232, 2007*

小川房人さんと過ごした日々
－前会長追悼－

大阪市立大学名誉教授 吉 良 竜 夫

Half-century days spent with Dr. Husato Ogawa－A tribute to the memory of the ex-president of KONC. Tatsuo Kira（*Emeritus Professor of Osaka City University*）

「2006年の２月３日，日本の生態学界から一人の異才が失われた.....」と書きはじめて，少しためらった。「異才」という，ありふれた言葉で呼んでよかったのだろうか。

しかし，すぐれた体力と気力，一見まじめそうな人柄から連発される軽妙な警句とジョーク，晩年の管理職時代には「世間の非常識はわしの常識」と広言してはばからなかった常識的通念への抵抗，どれをとっても，小川房人君（と呼ばせてもらう）はやはり「異才」というほかはなさそうだ。

はじまり

1951（昭和26）年，私は，誕生したばかりの大阪市立大学理工学部（のちに理・工に分離）の生物学科で，初代の助手の藤岡喜愛君が人類学に転向した後がまの若手を探していた。そこへ，京大農学部の応用植物学研究室を卒業したばかりの小川君を連れてきたのは，おなじ研究室の先輩である中尾佐助君だった。場所は，学部最初の仮学舎であった旧扇町商業の校舎（大阪市北区西扇町）。学生時代からの友人中尾君は，後年「栽培植物と農耕の起源」や「分類の発想」などの独創的な業績で，異才中の異才と呼ばれた人だから，彼はすでに小川君の異才を見抜いていたのかもしれない。

しかし，初対面の第一印象は，口数も少なく，広島県福山の旧家の御曹子で名門誠士館高校出身の秀才という以上のものではなかった。私がこれからの研究室の構想を話すと，「それでは，帰ってよく考えてお返事します」という反応が返ってきた。ところが，即刻中尾君が口をはさんだ。「君，帰って何を考えるんだ。考えたっていい知恵なんか出やしない。さあ，今すぐ就職をきめるんだ！」

フィールドワークへ

この一言で，三十数年間の小川君との研究協力が始まった。最初は，そのころ健康に自信のなかった私の実験的研究を手伝ってくれていたが，数年後1955年から森林を対象にしたフィールドワークが始まり，小川君の本領が発揮されることになった。

それは，北大（舘脇　操教授）・東大（佐藤大七郎教授）・京大（四手井綱英教授）・大阪市大の４大学の協力による，北海道から沖縄までの「森林の生産力に関する研究」プロジェクトだった。新分野として注目されはじめた植物群落の生産生態学研究のなかで，最も手ごわい対象である森林と取り組む野心的な試みであった。

当時は，現在のような高度な計測機器はなく，野外作業は，一定面積の試験地の毎木調査と，限

られた数の試料木の伐採・測定から生産量を推定しようとする肉体労働だった。参加者の大部分は，大学院生を主体とする若手で，小川君はやや年長の現地リーダー格，作業の指揮をしながら，推定の方法論を考えていく役割だった。

このプロジェクトを通じて生まれた，やがて日本の森林生態学をになうようになった後進の院生たちとの交友も，小川君の大きな財産になった。北海道では，館脇門下の伊藤浩司・辻井達一・河野昭一・渡辺定元といった人たち，京都では四手井門下の只木良也・荻野和彦・岩坪五郎・菊沢喜八郎・山田　勇などの各氏。こうした人脈も，その後の小川君の，そして大阪市大の活動を直接・間接に支えてくれた。

このプロジェクトの最大の成果は，幹の直径や樹高の測定値から，かなり高い精度でその木の全重量や葉量を推定する方法を開発し，毎木調査と合わせて全林分のバイオマス測定の基礎を確立したことであった。あとで述べる小川君の精力的なデータの吟味は，この過程で，表面には出ないがきわめて大きな役割を演じた。

このプロジェクトの進行中に，国際学術連合会議（ICSU）と国際生物学連合（IUBS）が，世界の人口爆発に伴なう食糧不足への危惧を念頭において，生物学分野では最初の大規模な国際共同研究プロジェクト「国際生物学事業計画（IBP）――人類の福祉と生産力の生物学的基礎」（1965～1974）――を発足させたのは，めぐまれた偶然であった。日本の研究グループは，このプロジェクトで最も重要な部分を占める陸上生態系，なかんずく森林の生産の分野で，豊富な経験と実績によってリーダーシップを保っていくことになったからである。

学　風

小川君の学風をつづめて言えば，資料を徹底的に検討・分析して，最後に簡潔・明快な結論を導く，ということになるだろうか。

定量的なデータ相互間の関係をみるためには，グラフ化が必要だが，当時は方眼紙に手でプロットする以外の方法はなかった。その結果は，おそるべき量の方眼紙の山だった。「君，君……，どのくらい方眼紙にプロットしてみたの？　キロ（グラム）で測るくらいの量やらんとあかんで」というのが，学生へのアドバイスの口ぐせだった。小川君の姿勢がうかがわれる。

森林の生産力研究の第一歩は，純生産量を推定することである。純生産量とは，一定期間に森林が光合成で獲得した有機物のうち，呼吸により消費されてしまう分を除いて，植物体へと合成された量を指す。例えば１年間隔で，前記のような方法でバイオマスを推定すれば，その期間のバイオマスの増加量は測れる。しかし，それは純生産量の全部ではない。純生産の一部は，枯れ落ちたり，動物に食われたりして失われているからだ。

枯死量は，落葉枝受け（リター・トラップ）を林内に設置すれば測れるし，動物の摂食量も，例えばトラップで集めた糞の落下量などから推定できよう。しかし，枯れたり食われたりするのは，その年に生産された植物体だけとは限らないから，こうしてえたバイオマスの損失量を，そのままその年の純生産の一部とみなすわけにはいかない。こうした難点のために，どのような手続きで測定可能な量から純生産量を推定するかについては，研究者間でまだ意見が一致していなかった。

小川君は，いろいろ試みたすえ，原点にもどって，植物体のバイオマスへの出入経路の収支表を作った。そして，１年間のバイオマスの増加量に，その期間の枯死・被食量の測定値の「全量」を加えたものが，その間の純生産量の最も適切な推定値になることを明快に示した。こんな簡単なことが，それまで明示されていなかったのは，不思議

といえるだろう。

小川君は，生態学会の近畿地区会の例会で，初めてこの結論を発表した。すると，猛然と批判に立ったのは，奈良女子大の津田松苗教授（故人）だった。この結論に反対するのではなく，「そんなわかりきったことを，学会発表するとは何事だ」という批判なので，びっくりした。とっさのことで，ここに書いた程度の説明もできず，小川君は壇上で立ち往生，私が応援に立とうとしたが，ことわられた。「これは，若い人の将来のために戒めとして言っているのだ！」

わかりにくいのと同様，わかりやすいのもまた，その意義を評価しにくいことがあるようだ。しかし，日本から提案したこの方法は，IBP 参加国用の調査法マニュアルに採用された。

マレーシアの IBP 熱帯雨林プロジェクト

なんといっても，小川君が最も本領を発揮したのは，IBP の目玉プロジェクトの一つとなった西マレーシア（マレー半島）での熱帯雨林生態系研究（日・マ・英共同）の日本チーム現地主任としてであった。

IBP の発足にあたって，日本学術会議は，全面的に参加をきめ，7つの部門のほかに熱帯林の研究を加えて，その主任に吉良を指名した。

私たちは，研究の対象としてマレーシアの熱帯雨林を選んだ。大阪市大では，すでにタイとカンボジアに3回の森林調査隊（1957～1964）を送り，小川君はそのうち2回に参加していた。しかし，この2国の気候には，最も雨量の多い地域でも明瞭な乾季があり，森林はいわゆる熱帯季節林で，典型的な熱帯雨林よりスケールも多様性も劣っている。私たちは，なんとしても，森林の発達の極であるマレーシア以南の典型的な熱帯雨林と取り組みたかったのだ。森林班に合わせて，JIBP の陸水生態系部門（主任：森　主一教授）も，マレーシアの湖の研究と取り組むことになった。予備調査を経て，森林班の対象はマレー半島中部ネグリセンビラン州のパソー国有林，湖沼班の対象は同じくパハン州のベラ湖と決まった。

このプロジェクトのもう一つのねらいは，長期滞在型研究の実現にあった。従来のエクスペディション型の調査では，期間が数ヵ月に限定され，調査地の選択，現地機関との交渉に時間がかかり，かんじんの研究活動にはわずかの日数しか残らないうらみがあった。国費による3年計画の JIBP 研究では，この問題も解消した。

現地主任としての活動

日本学術振興会と・マレーシア政府との間に IBP 研究についての協力協定書が締結されるまでには，1967～70の3年半かかり，現地での活動はやっと1971年から始まった。日本チームの現地主任として，人柄と経験から小川君が最適任であることは，関係者の間にまったく異論はなかった。

小川君の仕事は，パソーの森から38km，ベラ湖から55kmの距離にある小さな町クアラピラに，1軒の家を借りてチーム・オフィスとし，パートタイムのハウスキーパーを1人やとって，快適な生活環境を確保すること，チーム・オフィスに1室の実験室を増築し，またパソーの調査地の入り口に現地作業小屋を建てること，から始まった。かれの堅実な仕事ぶりは，鉄木の材で建てた作業小屋が，30年以上経った今もマレーシア森林局のパソー研究林管理事務所として使われていることからもわかる。ハウスキーパーの「おばちゃん」（中国人の朱夫人）も，仕事ぶり・人柄ともに申し分なかった。

こうした現地作業のほかに，日本と同様の協定書を結んで共同研究をすることになった英国の王立協会チーム，およびマレーシア・チームとの間の役割分担の交渉（IBP の主目的である生物生

産力の測定は，ほとんどすべて日本チームが担当した），日本からの研究器材の輸入，長い期間かかる隊員のビザ取得の手続き，などの業務をこなすために，たえずクアラルンプールとの間を往復した（当時は片道だけで１日仕事になった）。

小川君が話す英語は流暢とはいえなかったし，マレー語は単語をならべる程度だったが，持ち前のねばりで，これらの交渉を確実にこなしていった。マレーシア政府の担当官や地元研究チームの人たちは，非常に友好的で親切だった。こまったことに，日本大使館へは本省から調査隊への便宜供与依頼の公文書がきていたにもかわらず，担当の館員は，小川君が公立大学の教員であることにこだわって，「なんで国が公立の面倒をみなければならんのか」などと冷淡で，彼を困らせた。

これには後日談がある。1973年だったか，皇太子夫妻（いまの両陛下）がマレーシアを訪問されたとき，生物学者である皇太子を意識したのだろうか，マレー大学の植物学者スパドモー教授による進講が行われた。マレーシアIBPチームのリーダーだった教授は，当然のことながら，パソーやベラ湖での日本隊の活動をくわしく紹介した。それを知った日本大使館は，大あわてで，初めて現地を見にきたという。

チーム・オフィスには，1974年３月のプロジェクト終了までに，森林班20名，湖水班14名の日本人研究者が，平均６ヵ月の期間滞在した。楽しみにしていた私は，あいにく学部の管理職に選出されて，ときどき短期間の訪問しかできなかったが，小川君は最長の通算２年間，現地主任の役割を果たした。

ときには下駄履きでクアラピラの町を闊歩するドクター・オガワは，町の名士になった。ときどき食事にいく市場の露店レストランなどでは，小川君が黙って腰をおろすと，好物の魚と指定の銘柄のビールとが自動的に出てくるというぐあいだった。英国IBPチームの指導者で，英国生態学会々長を勤めたこともあるバージェス教授をこのレストランに招待したとき，彼は小川君のふるまいにつくづく感心して，『こういう人を我々は「やり手」というんだ』という意味の感想をもらした（残念ながらもとの英単語を忘れた）。

パソーでの研究業績

研究面での小川君の大仕事は，20m×100mという大面積の完全伐採調査を企画し，成功させたことだった。これだけの面積に生育するすべての植物の地上部を取り除いて秤量する作業である。とくに，幹の目通り直径５㎝以上の樹木はすべて根元から伐り倒し，高さ10mおきの層別に切り分けて，幹・枝・葉それぞれの重さを計り，乾燥重・葉面積測定用のサンプルを取った。これを，幹の直径１m以上，高さ55mの大木までやるのだから，およそ350トンほどの木を切り刻んだことになる。

小川君と，研究者数名，それに現地人夫13人を加えて，完了には２ヵ月かかった。おそらく熱帯林に関するかぎり，空前絶後の調査だった。おかげで，幹の目通り直径と樹高がわかれば，その木の地上部バイオマスを10%程度以内の誤差で推定できるようになった。しかし，それだけの目的なら，こんな大げさなことをしなくても，少数の試料木を伐ればすむ。小川君は，せめて0.2ha程度の面積でも，だれからも文句のつけようのないバイオマスや葉面積の実測値が欲しかったのだろう。いかにも彼らしい。

小川の計算式は，今でもときどき各地の森林に利用されているし，また伐採跡地は，熱帯雨林の再生・復活過程の追跡に理想的な場となり，40年後の今も日本とマレーシアの協力調査が続けられている。

小川主任の人柄で，チーム・オフィスの空気はいつもなごやか，揉めごとは全くおこらなかった。

若い参加者たちを小川流に育てた実績も，小さくはなかっただろう。のちに惜しまれてカリフォルニアで客死した安部琢哉君をはじめ，松本忠夫・米田　健といった院生（あるいはもう少し年長の参加者も）の人たちは，折にふれて小川君から浴びせられたジョーク混じりのいましめを忘れることはないだろう。

晩　　年

IBP のプロジェクトが終わったのちも，我々は新しい対象を求めて，東南アジアの未知の地域を訪ねた。1975年末から76年にかけては，初めてミャンマーに入り，さらにインドネシア領ボルネオ（カリマンタン）の奥地に足をのばした。ミャンマーは単なる観光ビザ旅行しかできず，森林らしい森林には行けなかったが，珍しい湖や風俗を楽しんだし，カリマンタンでは，樹高が最大70〜80mにおよぶ，パソーよりもさらに見事な熱帯雨林に初めて接した。

しかし結果として，これが小川君との最後の海外旅行になってしまった。つぎつぎと機会があって，中国（華中・華北・シルクロード）・北米・中南米などの旅行をしたこともあるが，父の故郷である滋賀県の琵琶湖を中心とする環境問題に力を注がざるをえなくなったからである。そして，ついに1981年秋には，定年を前にして，武村正義知事の要請で琵琶湖研究所を作るために，大阪市大を退職して大津に転居することになり，長年の小川君との同僚関係が断ち切られた。

会う機会も非常に少なくなったが，小川君は，私の後任として理学部付属植物園の園長になり，定年後は大阪市立自然史博物館の館長の職についた。この時期の活躍ぶりは，「世間の非常識はわしの常識」というタンカ以外あまり私は知らない。

すっかり公職を離れたとき，小川君が北緯35線沿いに世界を一周する旅に出ると宣言したのにはびっくりした。大津の町はちょうどその線上にあって，ＪＲ大津駅のプラットフォームには，35° Ｎの標識が立っているから，ここが彼の出発点だった。また小川君が，そんなに世界の生態地理の体験にあこがれていようとは思わなかった。あれよあれよと見ているうちに，北米から始まって，アフリカ北端，近東，パキスタン北部とどんんどん足を延ばし，ほぼ完成に近づくと，こんどは黄河をさかのぼって，チベット高原上の源流までいく。いろいろな事情で，楽しみにしていた引退後の未知の自然の訪問をあきらめざるをえなかった私には，ただただうらやましかった。

「小川君，ずるいよ。一人で楽しんでいるだけではもったいない。だれもが君のまねはできないんだから，貴重な経験を公表して周囲の人たちにも伝えてちょうだい」，何度もそう言った。昨年，最後のシベリア旅行の終わったところで，やっとその気になり，報告シリーズの第１稿が本誌の50号に載ったけれども，すでに遅すぎた。

わ か れ

一昨年（2004）から，小川君と内地の旅をする機会ができた。大阪市大探検部 OB の細川舜司君が，私たち２人を連れ出して，楽しみ，かつ森林植生や自然の知識を仕入れようと招待してくれることになったからだ。一昨年の第１回は倉敷の三朝温泉，昨年秋の第２回は若狭の三方五湖だった。杖をついてヨボヨボ歩いている私とちがって，小川君は終始元気で，健啖さも昔通りのようだと思った。

しかし，10月11日に京都駅で別れて１ヵ月あまりで，はげしい腹痛が彼をおそった。そして新年早々には，末期の膵臓ガンという恐ろしい診断が，奥様から知らされてきた。それでも，抗ガン剤もあることだし，急なことはあるまいと思っていた。南海高野線沿線の近畿大学付属病院に見舞いにあ

がったのは1月26日のことだった。小川君は，ちょうど近くのお嬢さん宅でゆっくり入浴して帰ってきたところで，足もともしっかりしていた。

彼の長年の夢は，大陸側のシベリアから間宮海峡を渡ってサハリンに上陸することだったが，前年の夏にそれが実現したときの膨大な量の写真を病室にもちこんでいた。ベッドの上に座って，私と，同行した依田恭二君の未亡人章子さんとに，熱心にそれを説明してくれた。この調子ならまだ当分は，と安心して別れをつげた。しかし，その翌日から病状が急変したという。意識がなくなり苦しみ始めて，わずか8日後に最後がきたとの知らせ。なんという驚き。さようなら小川君，半世紀をこえる交友だった。

(2006／12／18)